

2024/1/27

リトルハウス通信

リトルハウスでは年間を通して、多くの実習生さんを受け入れしています。それは社会福祉士、精神保健福祉士、看護師を目指す学生さん達で、それぞれが国家試験の合格に向けて試験勉強をし、大学での学びを続けながら、平行して実習というかたちで実践現場の経験を積んでいるわけです。実習生さんは20代の現役の学部生の方から、社会人で通信制大学に通われている方等々、年代は多岐に渡ります。

とりわけ社会福祉士の国家資格の受験要件は「異なる機能を持つ2カ所以上の実習先」でそれぞれ60時間と180時間の計240時間の実習を行うことになっており、社会福祉士を目指す実習生さんは一つの施設で最長1ヵ月半近くを過ごすことになります。

毎回のことですが実習初日は緊張の面持ちで過ごす実習生さんも1週間ほど経過するとリトルハウスの環境に慣れていき、利用者の方々との親交も深まり、最終日が近づくにつれて職員も利用者さんも、そして多くの実習生さんもそれぞれに実習が終わることを寂しく感じ、名残惜しい気持ちになるものです。

そんな中、実習生さんにとって「実習施設で現実を知る」こと以上に、「その施設の空気を自然に感じ、居心地の良さを感じられること」こそ、「学びの深い実習」だと私は考えています。それは実習生さん達が無意識に持っているかもしれない、施設や対象者についての「先入観」が外れたことを意味するからではないでしょうか。とりわけ精神疾患を持っている方に対してのスティグマは社会の中に多く存在しているわけですが、利用者と多くの活動を共にすることで、むしろ「自分との違い」ではなく、自分自身との共通点や共感できるポイントを発見し、そこで初めて「居心地の良さを感じる」ことになると私は考えています。

昨年12月、リトルハウスに実習に来られた実習生さんの所属大学で開催された「実習報告会」に参加したのですが、そこには各福祉施設に実習に行かれた多くの学生の皆さまが集まり、実習でどのようなことを学んだのかを発表していました。実習先は、特別養護老人ホーム、生活介護事業所、就労系施設、社会福祉協議会等々と多岐に渡ります。そして発表の多くは実習を通して「自分自身の変化の過程」を強い思いと共に伝えてくれ非常に興味深い内容でした。そしてすべてに共通しているのは、自身が持っている先入観がとれて「新たな価値観が育まれていく物語」でした。

福祉施設に通所している方々は「生きづらさ」を抱えながら、社会の隅に追いやられていることが多いと思いますが、実習を通してそんな方々と共に過ごし、自分自身との共通点をひとつひとつ発見し、その結果、共に過ごすことに居心地の良さを感じられるようになったなら、それは座学では得られない本当の学びだと思います。そしてリトルハウスで実習生を受入れ続ける大きな意義を今回の実習報告会で感じた次第でした。

(鈴木)